



## 「子どもたちを被害者にも加害者にもしないために」前編

令和五年十月二十四日に、倉敷市青少年を育てる会指導者・倉敷市少年補導委員合同研修会で実施した講演会の要旨を三回に分けてお届けします。講師は、おかやま犯罪被害者サポートファミリーズ 理事の市原千代子（いちばら・ちよこ）先生です。

### ●「命の授業」

こんにちは。私は、普段は小中高大学等で、子どもたちに「命の授業」を話しています。今日は、少し短くした話と、女子少年院に講演に行った話をします。

私は、話を始める前に、まず「今日お会いできて、本当にうれしく思っています」と伝えていきます。それから、「私は、普通に主婦、母、社会人として生活をしているだけの者だから、決して話が上手ではないですが、一生懸命話をします」とお断りしてから話します。まず、必ず持ってきているものがあるので、見てください（写真を出す）。これは、二十三年前平成十一年に十八歳で亡くなった二男・圭司の写真です。なぜ私が写真を持ってくるかですが、私は「犯罪被害者」と言われます。でも、本当に

被害に遭ったのは、圭司だけだと思います。

被害の悲しさや悔しさや怒りなどは、圭司しか語れないと思います。でも、圭司は二度と自分の口で語る事ができません。私が語れるのは、残された遺族としての母親の思いしかありませんが、この写真から圭司が語りかけているものが必ずあり、それを感じながら聞いていただきたいという思いがあります。

また、「犯罪被害者」とよく言われますが、命を奪われた人、傷害を負わされた人、心や体の深いところにつけられた傷を背負いながら生きていかなければいけない人など、被害に遭った「当事者」がいます。そして、命を奪われた人の周りには、私のような「遺族」と言われる人がおり、障がいを負わされたり、心や体の深いところに傷を負わされてしまった人たちの周りには、

介護や看護をしたり見守ったりする人がいると思います。

「犯罪被害者」とひとくくりに言いますが、当事者とその周りにいる人たちがいます。その違いを知っていただきたい思いで二男の写真を持ってきました。

### ●私たち家族の事件

まず、事件のことから話をします。一九九九年、平成十一年の三月十七日の夜九時半ごろ、当時十八歳だった同級生と、十九歳と二十歳だった先輩二人の、合わせて三人の幼なじみの男たちに電話で呼び出されて出て行った圭司は、彼らから「電話に出なかった」「日頃の態度が横柄だ、生意気だ」と因縁をつけられ、暴行を受け、翌日の昼過ぎに亡くなったというのが、私どもの事件です。

### ●事件に至るまで（高校一年まで）

その事件に至るまで、圭司がどのように大きくなったのか話します。私は、一九七五年、昭和五十年の十二月に結婚し、翌年の七月末に長男を出産しました。出産を機に仕事をやめ、主婦・母としての生活を始めました。翌年の昭和五十二年の夏に次の子を流産で失い、昭和五十三年六月には、九か月、お腹の中で大きくした子を死産

で失いました。私は、長男を一人っ子で育てるつもりはなく、もう一人子どもが欲しいと思っていました。

そして、昭和五十五年の春に、新しい命がお腹に宿っていることがわかりました。上二人の子を亡くしたので、その子はお腹にいるときから大切に育てて、昭和五十五年の十一月二日に、元気に生まれてきてくれたのが、二男の圭司でした。その後私は、昭和五十八年の五月に一番下の娘を出産して、平凡な主婦として生活を送りました。私が現在も住んでいるところは、岡山県の小さな町です。保育園から中学校卒業まで、他の学区から子どもたちが入ってこない学区で、こういう地区では、近所の子どもたちが先輩後輩関係なく友達という状況で大きくなります。また、大人たちの関係も良好で、家族や近所の人、多くの大人たちに見守られながら、子どもたち三人はそれぞれ大きくなりました。

高校に入学して、圭司はいろいろな経験をしました。まず、他の地域の学校から来ている友達の中に入りました。友達が多い子で、新しい友達の中に入ったのはとてもうれしかったみたいで、話をたくさんしてくれました。二つ目は、小学生からしていたテニスを続け、高校でもテニス部に入りました。三つ目は、学校の許可があればア



倉敷市立倉敷東小学校 院内学級 共同作品 (令和4年度)

「笑うと勝ちよ あっぷぷう」(習字)

一文字ずつ交代しながら文字を書きました。友達の書いた文字とのバランスを考えて、楽しく話し合いながら仕上げました。

アルバイトができたため、家の近くのカソリンスタンドで、土日・春休み夏休みにアルバイトを始めました。

そして四つ目は、子どもたちの間で、大人の目を盗んで行われている暴力でした。一年生の秋、目の周りを真っ黒にして友達に連れられて帰ってきたことがあり、事情を聞くと、「友達とバスケットボールをしていてぶつかった」と言いました。小さい時からいつも動き回って子だったので、そんなのかなと思ひ、深く追求せずに終わりました。でも、事件の後、同級生たちが「あれは学校の中で殴られていたんだ」と教えてくれました。高校には、そういった問題が複数あり、他のお母さんからも聞

いていました。でも私は、圭司はそれなりに楽しい高校生活を送っており、暴力の問題があるとは思っていませんでした。

### ●暴力被害と休学

一年生の終わりに、仲良しの同級生が、学校を中退して、岡山市内で一人暮らししながら美容師を目指すことを決め、それを見た圭司の気持ちに変化しているのを感じていました。二年生に進級してすぐに、ささいなことから、教室で、圭司より体格が良く力もある同級生の男子に思い切り殴られて、左上の目の奥を骨折する、眼底骨折というけがを負わされてしまいました。救急車で近くの病院に運び込まれた後、医者の勧めで、岡山市内の病院に翌日転院しました。検査の後、「治す場合は、頭を切開して手術する必要があるが、体に負担がかかるので、生活ができるなら様子を見ながら過す方がいい」と言われました。けがの直後は、目の周りは痛み、鼻血や嘔吐もありましたが、時間が経つと、何とか生活できることがわかり、私たちは様子を見ながら過すことを選びました。

五月上旬に退院した後、圭司は高校に行こうとしなくなりました。私は高校を卒業して欲しくて、何回も話し合い、けんかもしましたが、どうしても行きませんでした。

### ●一人暮らしの経験と進路の迷い

でも、問題が起きました。一番の問題は、圭司の友人たちが、大人の目がなく気兼ねがないから、アパートに遊びに来るのとでした。仕事から帰る頃に遊びに来ることが多く、圭司も友達がいる方が嬉しいし楽しいからと、食事もせず夜も寝ないで、朝まで話したりテレビを見たりゲームをしたりしていたようです。そして、朝には仕事に行き、仕事から帰ると別の友達とまた同じようなことをしてしまうことを繰り返していたようです。いくら若くても、繰り返すと体には負担がかかります。

二か月後のある日、眼底骨折で運ばれた岡山市内の病院から連絡がありました。圭司が扁桃腺を腫らし、高熱を出し、緊急入院してしまいました。先生から「扁桃腺を抱えていると、今後も起こるため、ちゃんと治したいなら、取る手術をしたほうがいい」と言われましたが、圭司は「今は取りたくない。退院したら、今度はきちんと一人暮らしを頑張る」と言ったので、仕方なく様子を見ることがしました。でも、結局うまくいかず、一人暮らしをやめ、勤務先にも断って帰ってきました。

同級生たちは三年生に進級し、就職進学などそれぞれの道を目指していました。それからいろいろな試しましたが、全て上手くいきませんでした。平成十年の年末には、運転免許を取り工場に働きに行きましたが、扁桃腺を腫らし、高熱で休むことが重なり、年内で仕事をやめました。そして、「人に迷惑をかけるから扁桃腺を取りたい」と言い、私たちも賛成して、二月の初めに扁桃腺手術をしました。退院後、圭司は「東京に遊びに行きたい」と言い、長男が東京で働いているから行かれました。長男は高校でとった資格で働いており、それを見た圭司は、「資格を取りたい。人と関わる仕事をするには、どんな仕事、どんな資格があるんだろう」とよく言っていました。同時に、「兄貴は、楽しい高校生活を送ってたよな。僕ももう一回高校生活を送りたい」とも言っていました。(中編へ続く)